多様な視点からみた森林再生

～野幌自然環境モニタリング10年の成果と展望～

石狩地域森林ふれあい推進センター　自然再生指導官　足立　康成

研究の概要

風倒被害を受けた野幌自然休養林の回復状況を把握するため、10年間にわたりモニタンリグ調査を実施してきました。「森林植生」「菌類」「歩行性甲虫」の3視点で回復度（第１～第３段階）を検証するとともに、「野生動物」の森林への影響についても調査を行い、さらに、これまでの成果を基に、今後の調査の方向性について検討しました。

調査の内容・結果

森林植生

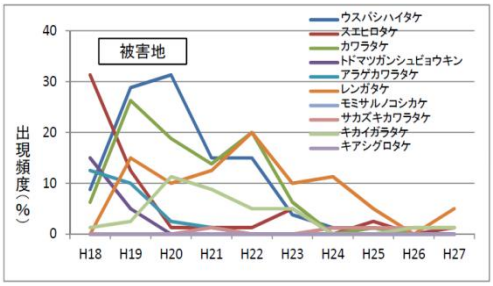
天然更新木、植栽木の生長状況調査（24箇所）及び下層植生調査（3箇所）

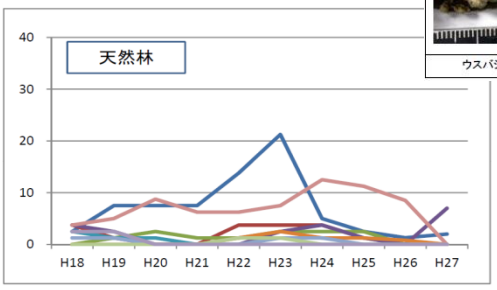
※被害地における天然更新木は在来種の種数や樹高が増し周辺森林への同化の道をたどっていると考えられ、植栽木は着実に伸張成長が増し枝張りが広がってきています

→ 第２段階

菌　類

木材腐朽菌の子実体採取・同定（12箇所・年２回）



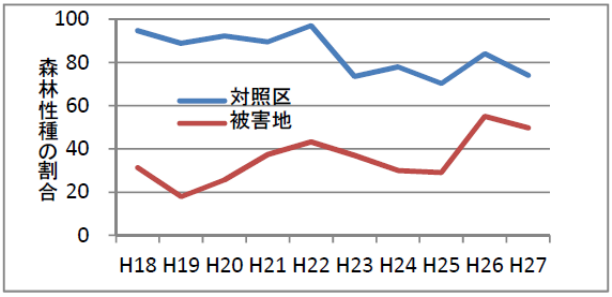


※被害地において、当初、出現頻度に変動が見られた種は、頻度が減少し天然林の林相に近づきつつあるが、種構成にはまだ差があります

→ 第１段階

歩行性甲虫

ピットフォールトラップによる捕獲調査（15箇所・年2回）



(参考)森林性の歩行性甲虫

※被害地において開放性甲虫の割合が減少し、森林性の歩行性甲虫の割合が増加しています

→ 第２段階

野生動物

自動撮影装置による調査（12箇所・年２回）※エゾシカの撮影頻度は低い値で推移しているため森林への影響はまだ少ないと思われます

今後の調査の方向性

―「野幌自然環境モニタリング検討会」で検討予定―

- ○ 経年変化が少ない調査については、実施間隔を検討
- ○ 新たな視点での調査内容の検証
- ○ 10年間のとりまとめ結果について地域住民等にお知らせ